

令和 6 年 5 月 29 日現在

機関番号：33910

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2020～2022

課題番号：20H01294

研究課題名(和文) 複言語学習における汎用的な言語間共通学習方略モデルの開発に関する国際比較研究

研究課題名(英文) A Comparative International Study for Developing a Model of Language-Learning Strategies in Plurilingual Education

研究代表者

深谷 圭助 (Fukaya, Keisuke)

中部大学・現代教育学部・教授

研究者番号：10425027

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 10,300,000円

研究成果の概要(和文)：グローバル社会の進行により、複言語・複文化主義や言語の自律学習に世界の関心が集まっている。そこで国際的に言語教育理論の枠組みに影響を及ぼしてきたCEFR(Common European Framework for Reference of Languages)の「複言語・複文化能力」と「自律学習」のコンセプトをベースとした「汎用的な語彙学習方略モデル」の構築をめざし、「辞書引き学習」を「JBモデル」として、幼児教育から高等教育、複数の言語教育、複数の異なる文化を有する欧州(イギリス)とアジア(日本、シンガポール)の三か国で導入実験、検証をし、自律的な「汎用的語彙学習方略モデル」の開発を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

グローバル社会の進展で言語教育の在り方が議論される中で、一国の中で様々な言語と文化が通用する社会から、一人一人の中に複数の言語能力や複数の文化への理解がある社会への転換が欧州評議会でも議論され、CEFRが示された。しかしながら、欧州以外のCEFRの受容は、評価枠組みのみを断片的に受容するのみであり、その中核的な概念である「複言語・複文化主義」や「自律学習」は十分に咀嚼されていない。こうした問題を打開するために、様々な国や言語や学校種を乗り越えて国際社会で汎用的に用いることができる「共通語彙学習方略モデル」の開発を行った。こうした比較研究は学術的に他に類を見ず、国際社会的には、大きな意義を有する。

研究成果の概要(英文)：The progression of global society has led to a growing interest among language educators in bilingualism and multilingualism and language autonomy learning. Therefore, we have developed a 'generic vocabulary learning strategy model' based on the concepts of 'multi-language and multi-cultural competence' and 'autonomous learning' of the CEFR (Common European Framework for Reference of Languages), which has influenced the framework of language education theory internationally. Aiming to construct an autonomous 'general-purpose vocabulary learning strategy model', the 'dictionary drawing learning' was introduced, experimented and verified in three countries in Europe (UK) and Asia (Japan and Singapore), which have early childhood education to higher education, multiple language education and multiple different cultures, with the aim of developing a 'JB model' of 'dictionary drawing learning'.

研究分野：言語教育学

キーワード：複言語教育 複文化教育 学習方略 自律学習 英語教育 中国語教育 フランス語教育 辞書引き学習

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

グローバル社会が進む中で、外国語教育の根入れの必要を迫られた日本において、初等教育からの外国語教育が本格的に始まった。その一方で、日本語も含む学習者の言語学習に対する動機づけや学習方略の問題は教育現場の課題として残されたままである。日本の外国語教育における理論的枠組みの構築において影響を及ぼしてきた CEFR(Common European Framework for Reference of Languages)は、欧州複言語主義における言語教育の枠組みを提供するものである。しかしながら、日本における理論的枠組みの受容は、元来の CEFR の複言語・複文化というコンセプトを無視し、過度に特化したものであるだけでなく、日常的に複数の言語を用いる環境に置かれている欧州人が持ちうるモチベーションを等閑視していると考えられる。CEFR の構築に貢献をしたアンリ・オレックは、CEFR における「自律学習」の重要性を訴えたが、CEFR の評価枠組みの国際的な展開に比して、「自律学習」に関する国際共同研究は十分な実績を積み上げていない。本研究における1つめの問いは「複言語主義に対応した言語間共通学習方略モデルを開発することで言語学習に対するモチベーションを学習者にもたらしうことができるか」という問いである。複言語時代に各言語学習の動機づけをどうするのかという問題は言語教育学において重要な問題として位置付けられている。一般的に言語学習における「語彙(単語)習得」には、「忍耐」が必要と考えられている。況してや、複言語を学ぶ場合、学習動機づけをどのように行うのか、あるいは、学習方略を如何にして習得させるかは、重要な問題である。本研究では、言語学習を言語ごとの学習方略ですすめるのではなく、汎用的な学習方略の確立を目指して、国や地域、言語を超えて通用する、効果的な言語間共通学習方略モデルを開発することをめざす。研究開始当初の2つめの問いは「JBモデルで取り扱う『紙の辞書』が現代において如何なる教育学的意義を持つのか」という問いである。デジタル化やAI技術の進展でデジタル辞典が紙の辞書に替わって社会に広がりつつある。この言語間共通学習方略モデルで用いるのは「紙の辞書」である。同モデルで学習者は「紙の辞書」を読む習慣を身に付け、既知の言葉に徴候的に出会うことで既知の言葉を再吟味する。さらに、読んだ語彙の掲載箇所に、当該語彙を記した通し番号付きの付箋紙を貼り付けるようにし、学習量を可視化する。このことで学習者は、意欲的に辞書をよく読むようになる。本モデルでは、従来の辞典指導のように、学習者に対し、特定の語彙の検索を当初から望まない。デジタル辞典は紙の辞典に比べて検索性が高いが、検索性が高くなるほど、辞典のセレンディピティ(serendipity)が失われる。本研究では、検索用途だけでなく「紙の辞書」の複言語教育教材としての価値を再定義し、「紙の辞書」が如何なる意義を持つのかという問いを明らかにする。本研究では、国際比較研究が難しいと考えられてきた言語教育実践を研究対象として取り上げる。辞書は語彙教材として各国のカリキュラムに位置付けられており、統制をかけやすく実施が容易である。しかも、複数国間に跨る国際的な辞書指導に関する研究はこれまで例がない。このことが本研究の学術的独自性となる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、複言語学習において国や言語を超えた言語間共通学習方略モデルに期待される「辞書引き学習(JB)」の言語学習者に対する動機づけと学習方略の有効性について、国際比較教育実践を通して明らかにすることである。

3. 研究の方法

具体的には、日本、イギリス、シンガポールの学校において、JBモデルを導入し、第一言語学習(母語、公用語)第二言語学習(公用語、外国語)第三言語学習(外国語)としての英語・日本語・中国語教育の授業記録やエビデンス、教師や学習者の逐語記録や質問紙によるデータの収集を行い、データ分析を通して、JBモデルの動機付けと方略の有効性について明らかにし、言語間共通学習方略モデルを確立し、世界各国の教育現場に、汎用的な言語(英語・中国語・日本語)間共通学習方略モデル指導手引書を提供することを目指す。

4. 研究成果

<日本>

4-1-1 慶應義塾大学第三言語(初級中国語)教育におけるJBモデル導入事例

複言語・複文化主義に基づく汎用的な学習モデルを構築するために、日本の高等教育(大学)の第三言語(中国語)教育においてJBモデルを導入した。実践校は慶應義塾大学、担当は吉川龍生教授である。この事例では、辞典と付箋を全員に用意することができなかつたので、単語集の単語に丸型シールを貼付することにした。学生の中には、シールを貼っていく方法を肯定的に捉えている者も少なからずいた。日本人学生は漢字に対して十分な知識を持っているので、中国語を65時間授業で学んだだけで十分に自信をもって使える単語が相当数あり、それを切り口に辞書引き学習の知っているものから始めるというコンセプトを応用する余地が十分にあった。一方で、知らない単語にシールを貼ればよいと考え、貼ることでモチベーションが上がることを理解していない学生も多かった。また、知らない単語を後回しにすることの意義やメリットを十分に説明できていなかった面があり、具体的な作業に入る前にその点をもう少し丁寧に説明した方が良かったかもしれない。

4-1-2 慶應義塾高等学校第三言語(中国語)教育におけるJBモデル導入事例

複言語・複文化主義に基づく汎用的な学習モデルを構築するために、日本の後期中等教育(高

等学校)の第三言語(中国語)教育においてJBモデルを導入した。実践校は慶應義塾高等学校、担当は荻野友範教諭である。評価としての生徒の自由記述では「辞書引き学習と言う活動が今後の学習や社会生活においてどのように役立つか/役立っていききたいかなどを中心に、辞書引きをやってみた感想を自由に書くこと」と、生徒の回答をある程度方向付ける設問とした。自由記述で書かれたものに目を通して気づくのは、日本語や英語、あるいは「中国語に限らず」や「他言語」という表現が用いられていることである。これらは複数の言語を関連付ける発想である。日本語と対照させることは、導入授業でも辞書を読むための切り口として話題提供しており、導入時にはあまり言及しなかった英語や「他言語」「別の言語」というかたちで、将来学ばない特定の言語学習においても活用できそうだという記述が散見された。

4-1-3 福井県足羽高等学校第三言語(中国語)教育におけるJBモデル導入事例

複言語・複文化主義に基づく汎用的な学習モデルを構築するために、日本の後期中等教育(高等学校)の第三言語(中国語)教育においてJBモデルを導入した。実践校は、福井県立足羽高等学校(多文化共生科中国語専攻)、担当は青山恭子教諭である。JBモデルを導入する前は、スマートフォンや電子辞書を使い、紙の辞書を使うことのない生徒たちであったが、JBモデルの取り組みを好意的に受け止めた。目に見える付箋の量に学習に対する達成感を感じ、言葉への興味も高まっていった。「自分の知らない中国語の単語をたくさん見つけることができ楽しかった。これからも自主的に調べていきたい」「最初は面倒だと思ったが、付箋が増えていくのと中国語の単語の意味や例文を読むのが楽しくなった」「日本語でもなかなか使わない単語がいっぱいあって面白かった。いっぱい調べられたのでよかった」「はじめは教科書などの分からない単語を調べて分かるようにしていたけど辞書をめくるうちにいろんな単語と出会うことができた」「初めて中国語を紙の辞書で調べたが、いろいろな単語を知ることができ、楽しみながら学ぶことができた」等のコメントの中で「日本語でもなかなか使わない単語がいっぱいあって面白かった」との記述があり、生徒の言語をメタ的に認知しようとする態度を見ることができた。

4-1-4 伊勢市立城田中学校第二言語(英語)教育におけるJBモデル導入事例

複言語・複文化主義に基づく汎用的な学習モデルを構築するために、日本の前期中等教育(中学校)の第二言語(英語)教育においてJBモデルを導入した。実践校は伊勢市立城田中学校3年生で、担当は、廣千香教諭である。複言語・複文化主義に基づく汎用的な学習モデルを構築するために、日本の中学校の第二言語(英語)教育における辞書引き学習モデルの実践と効果分析をした。まず、生徒が「既知」と見做している単語を省察し、メタ的な語彙認識能力を身に付けていたことを「辞書引き日記」の記述から明らかになった。次にルーブリック評価を考察した。21名の生徒の内、17名の得点は向上し、4名の得点は変わらなかった。得点が低下した生徒はいなかった。ルーブリック評価規準に対応した質問紙調査を分析するとJBモデルによる単語学習が特定の単語の語釈や綴り方を覚えるのではなく、単語を俯瞰的に捉えるメタ的に語彙認知する視点が形成されつつあることを窺わせる回答が散見された。例えば「文字の数が多くて見たくもないという単語が、自分の知っている単語に接頭語や接尾語がついているだけだということに気付いた」とか「アメリカ英語とイギリス英語によるスペルの違いや発音の違いを見つけた」などがその例として挙げられる。最後に語彙検定の分析である。実験群の3年2組の第1回(事前)の検定の平均は61.9点(N=20)、第2回(事後)の検定の平均は64.9点(N=20)である。両側検定のP(T<=t)値は0.020579716であり、0.05よりも小さいので、帰無仮説が棄却され、第1回検定(事前)と第2回検定(事後)との間に明らかな有意差があった。

4-1-5 石垣市立石垣第二中学校第二言語(英語)教育におけるJBモデル導入事例

複言語・複文化主義に基づく汎用的な学習モデルを構築するために、日本の前期中等教育(中学校)の第二言語(英語)教育においてJBモデルを導入した。実践校は石垣市立石垣第二中学校、担当は高原かおる教諭である。複言語・複文化主義に基づく汎用的な学習モデルを構築するために、石垣第二中学校の第二言語(英語)教育におけるJBモデルの導入と効果分析を行った。その結果、語彙理解力の向上に効果がみられた。同モデルの導入により、生徒が内面にある英語(既知語)と向き合うことで言語・社会文化的アプローチが可能になり、生徒自身の単語認識が更新されより洗練された言語推論ができるようになったことを示す生徒の発言が実践記録から数多く見られた。また、JBモデルに取り組んだI中学校(実験群)と似た教育環境下にあるO中学校(統制群)で英語語彙検定を実施し、統計的分析を行った。その結果、統制群と実験群の2回の語彙検定の間の得点差の平均に関して、JBモデルを行った実験群が、行わなかった統制群に比べ、語彙力の伸びに有意な差があったことが明らかになった。さらに、統計的にその効果を分析するために、実験群(石垣第二中学校、N=130)と統制群(O中学校、N=106)の1回目の語彙検定を実施し、t検定を行った。実験群と統制群との間で統計的に有意な差があったかを検証した。その結果、P値(両側)が0.194705336であり、0.05以上で有意差はなかった。ところが、2回目の語彙検定を行い、t検定を行ったところ、実験群(N=130)と統制群(N=106)の間には、P値(両側)0.00478946であり、実験群と統制群の間で有意な差があることが認められた。このことは、モデル導入以前、実験群と統制群の間では、有意な差は認められなかったが、モデル導入後、実験群の石垣第二中学校と統制群のO中学校の間には有意な差が認められたことを示す。

4-1-6 新潟市立石山中学校第二言語(英語)教育におけるJBモデル導入事例

複言語・複文化主義に基づく汎用的な学習モデルを構築するために、日本の前期中等教育(中学校)の第二言語(英語)教育においてJBモデルを導入した。実践校は、新潟市立石山中学校

1年生の2クラスで、担当は武石裕子教諭である。実践は、週4時間の英語授業の内、2時間の帯活動で行った。毎回、JB日記を記入させた。ルーブリックは伊勢市立城田中学校で使用したものと同一のものを使用した。付箋の枚数は、スプレッドシートにを入力し、合計枚数と進捗状況がわかるグラフが自動的に示されるようにした。JBレポートは授業支援クラウド「ロイロノート」の提出箱に定期的に提出させた。JBレポートでは、今までの合計枚数、辞書引きで分かったこと・気が付いたこと、これからの目標を記入させた。実践の検証方法は、アンケートと定期考査で行った。アンケートは「英語学習に関するアンケート」と「辞書引き学習アンケート」の2種類で、それぞれのアンケートの内容として「内的調整」「同一化的調整」「取り入れの調整」「外的調整」の4項目で質問項目を作成した。それぞれの検証方法において、JBモデルの導入と英語学習に対する主体的な学習態度は結び付いていることが明らかになった。また、一人一台端末でインターネットに接続した一人一台端末を日常的に利用するようになることで、言葉の意味や使い方を調べたときに、その情報が何をもとにして出てきた情報であるのかを気にすることがほとんどなくなってきていることに対して、JBモデルは、言葉の本来の意味や複合的な意味について接近するきっかけとなることが確認された。

4-1-7 島根県邑南町教育委員会（島根県邑南町立羽須美中学校・瑞穂中学校・石見中学校）における第二言語（英語）教育におけるJBモデル導入事例

複言語・複文化主義に基づく汎用的な学習モデルを構築するために、日本の前期中等教育（中学校）の第二言語（英語）教育においてJBモデルを導入した。実践校は邑南町立羽須美中学校、瑞穂中学校、石見中学校、担当は邑南町教育委員会堀尾亮介主事である。JBモデル導入当初と、9か月後の「辞書引き日記」の表現を比較すると、評価の観点が増加していたことが明らかになった。特に、新たな知識を獲得したことに関する気づきのみならず、他の単語の意味や使い方に気付くようになった生徒やそれと関連する単語に着目するようになった生徒の様子が「辞書引き日記」から読み取れるようになった。また、英単語はアルファベットの組み合わせによる音の変化が非常に複雑であるが、JBモデル導入により、音の変化による綴りの違いを理解し、発音と綴りの関係を理解できるようになった。生徒のコメントに「英単語に関わる知識が広がり、ALTの先生と英語で少し話せるようになった」という記述があった。JBモデルの導入により、培った英語語彙に関する知識を会話の話題として用いようとする意識が生徒に芽生えたことは、自律的な語彙学習の習慣が定着しつつあることを示すものと考えられる。

<イギリス>

4-2-1 英国ウスターシャー州キャッスルモルトンCE小学校第一言語（英語）教育におけるJBモデル導入事例

複言語・複文化主義に基づく汎用的な学習モデルを構築するために、英国の初等教育の第一言語（英語）教育においてJBモデルを導入した。実践校はウスターシャー州キャッスルモルトンCE小学校、担当はショーン・カッファーク教諭である。同校において、JBモデルを授業に取り入れた最初の成果は、児童らがすぐに辞書の使い方を自主的に学ぶことに興味を持つようになったことである。やがて、馴染みのある語彙の周囲にある単語への興味へと児童らの関心が遷り変わり、児童らは同じ語源を持つ単語同士のつながりを作り始めた。この好奇心は、語彙の習得やスペルの正確さへの、より自主的なアプローチを育んだ。辞書は、ライティングの授業中だけでなく、リーディングの時間にも児童らは自ら手に取るようになった。科学、歴史、地理などの他の科目でも、彼らは辞書を引き、新しく学んだ語彙を付箋に書き込んでいた。その結果、彼らは自分の学習とより強く結びついたり、特定の教科の単語同士を結びつけたりするようになった。また、彼らは、出てきた単語の意味や発音表記を自主的に確認することをとても楽しむようになった。このことは、熱心な読書家である児童らに特に顕著で、自分で答えを見つけるために必要な方略を手に入れたことで、自律的に読書ができるようになった。JBモデルのおかげで、受動的な暗記学習になりがちな語彙指導を、エキサイティングでやりがいのある能動的な授業に変えることができた。JBモデルをカリキュラム全体に少しずつ、そして頻繁に取り入れることで、授業者のクラスの自律性に大きな効果があり、新しい語彙の習得にも非常に良い効果をもたらしている。JBモデルプロジェクトに参加した児童らに尋ねると、そのほとんどがオンライン辞書よりも紙ベースの辞書を使いたいと答える。田舎の学校では、インターネット接続が常利用できるわけではない。彼らは、辞書に載っている情報の信頼性が好きだとも言っている。

4-2-2 英国ウスターシャー州キャッスルモルトンCE小学校第二言語（フランス語）教育におけるJBモデル導入事例

複言語・複文化主義に基づく汎用的な学習モデルを構築するために、英国の初等教育の第二言語（フランス語）教育においてJBモデルを導入した。導入校はキャッスルモルトンCE小学校、担当は、ショーン・カッファーク教諭である。インタビューでは、フランス語辞書を読むことによるフランス語と英語の違いに関する児童の気づきが述べられている。教師による「フランス語辞書がフランス語学習を助けているか」という問いで、英語とフランス語の異同に関する様々な気づきが提出されている。例えば、英語圏における「アイスクリーム」という言葉は、フランス語では全く異なる言い方をする点なども児童の興味を引く点である。また、児童が「英語とリンクしているのはフランス語だけではないのですから、『この単語の意味はわかるがこの単語はこの単語から来たのだろうか』と考えることが大切です。そして、その言葉を別の言語で見ると、類似点が見えてくるのです」と述べたことに対し、教師が「それがヨーロッパの言語の面白いところですね。英語は他の言語から単語を借りるのがとてもうまいですから。たとえば“café”とい

う単語は、私たちが借用したものです」と応答したことから分かるように、Year6 になったばかりの子供に対し、フランス語辞書引き学習を通してフランス語語彙を通して、英語の特質を他言語との関わりの中で相対化しようとしている点が確認できる。これは複言語主義における「言語の多様性を容認し、言語の価値を等価に置くこと」に関わる示唆であると見做すことができる。

4-2-3 英国オルトリンカムグラマースクールフォーボーイズ第三言語(中国語)教育における JB モデル導入事例

複言語・複文化主義に基づく汎用的な学習モデルを構築するために、英国の初等教育の第三言語(中国語)教育において JB モデルを導入した。実践実験校はマンチェスター郊外のオルトリンカム・グラマースクール・フォーボーイズである。担当は丁佳(Ding Jia) 教諭である。

成果として、生徒たちの自主性が非常に強く、生徒中心の実践が可能となったことがある。JB モデルを始める前、生徒は教科書の中の単語や教員がリストアップした重要語彙を学ぶだけだった。JB モデルの実践過程で、生徒は一定の指定されたテーマの中で、最大限の主体性をもって自分が面白いと思える語彙を探し学習した。例えば、トレーニングというテーマで学習した際には、生徒は辞書から「カヌー(划艇)」「重量挙げ(举重)」「ジョギング(慢跑)」などの関心のある語彙や、実際にトレーニングで使いそうな語彙を発見し、教科書に出てくる「太極拳をする(打太極拳)」や「体操をする(练体操)」といった語彙だけに縛られずに学習することができた。また、一部の生徒は他と違う語彙を見つけることで生徒や教員の注目を集めようと、辞書の中からできるだけ興味深い語彙を見つけようとした。それらの語彙はすぐに広がって使用され、容易に定着していった。JB モデルは、語彙学習の自主性を高めるのみならず、生徒たちは既知の知識を利用して、主体的に語の構造に関する質問を行ったりもした。例えば、天気について学んだときに、ある生徒が「あめかんむり」の部首の漢字の中から「零」という字を見つけ、なぜ「零」に「あめかんむり」があるのか、ゼロという数字と雨とどう関係あるのかと質問した。生徒が主体的に考えて質問することを通じて記憶が鮮明になる。自主的な学習によって言語学習はより効率的になり、JB モデルは中国語を学習するモチベーションを与えていた。

<シンガポール>

4-3-1 シンガポール・マドラサ・イルシャド・ズーリ・アル・イスラミア第一言語(英語)教育における JB モデル導入事例

複言語・複文化主義に基づく汎用的な学習モデルを構築するために、シンガポールの初等教育の第一言語(英語)教育において JB モデルを導入した。実践実験校はマドラサ・イルシャド・ズーリ・アル・イスラミア(以下、マドラサと略記)である。担当はスフェンディ・イブラヒム教諭とロザナ・ムハンマド・ザイド教諭である。JB モデルは「汎用性の高い教授法」であるため、様々なレベルの子供たちの要求に応えることができる。多くの教師は、子供たちの語彙学習を強化するために、これを英語のレッスンに取り入れ、絶賛されている。JB モデルは、試験で優れた結果を出すことに向けて、非常に効果が高いと考えている。JB モデルの実践的方法論を全てのレベルに導入することで、今後数年間で語彙分野の成績が改善されることを期待されている。JB モデルは努力をほとんど必要としないだけでなく、各単語の意味を学ぶことを忘れず、児童が数千以上の単語を学ぶことができる点で大きなチャンスを開く。JB モデルと試験対策のコラボレーションは、子供たちが国際的なプラットフォームで使用される最も一般的な言語である英語を受け入れるための努力において、学習にさらなる深みを与えることは間違いのない。JB モデルはより多くの児童らに利益をもたらすことは明白である。

4-3-2 シンガポール・マドラサ・イルシャド・ズーリ・アル・イスラミア第三言語(アラビア語)教育における JB モデル導入事例

複言語・複文化主義に基づく汎用的な学習モデルを構築するために、シンガポールの初等教育の第三言語(アラビア語)教育において JB モデルを導入した。実践実験校はマドラサ・イルシャド・ズーリ・アル・イスラミアである。担当は、シティ・ハイルンニサ・アブドゥラ教諭である。児童らは、アラビア語辞典からランダムに単語を探し、それ付箋に書いて辞書に貼り付けるという活動から始めた。数日のうちに5人程の子供たちが、80以上の単語を覚えることができた。アラビア語の単語のスペルを覚えるために、単語を書き込む必要性を感じ、ノートに単語を書き込ませた。その後、児童らはアラビア語の単語の綴りが上達したことについて肯定的な感想を述べ、また、JB モデル導入によって、アラビア語の単語に触れる機会が増え、語彙が増えたとも述べていた。アラビア語の試験が近づいたので、復習のために JB モデルを用いた活動を用意した。驚くべきことに、取り組み結果について好意的かつ肯定的であり、従来のテストよりも、JB モデルの方が、語彙力向上に貢献したとのフィードバックを得た。児童らが JB モデルから何を得たのかを知るために、保護者を通じて生徒らに効果を尋ねることができた。「JB モデルのおかげで、今まで知らなかったアラビア語の単語を知ることができた。新しい単語を学ぶだけでなく、単語のスペルも学んだ。家で仕事をしているときに、タグ付け(辞書に付箋を貼ること)した単語も覚えていた」「アラビア語辞書で単語を探すのは難しいが、楽しいと述べている。ポストイットに単語を書き、辞書に貼って新しい単語を覚えたり、インセンティブをもらったりできるので楽しい。児童が辞書を使うことで、自分が見つけた単語の意味を知ることができるようになるのは、全体的に良い取り組みだ」「辞書を引くことは、特にインシア(アラビア語の作文)や単語の意味を理解するのにとても役に立った。また、この活動によって単語を覚え、単語の正しい綴りを覚えることができるようになった」以上のコメントから、アラビア語学習で JB モデルが効果的であることが肯定的なフィードバックによって示された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 深谷圭助、吉川龍生、関山健治	4. 巻 14
2. 論文標題 イギリスの公立小学校における辞書引き学習の導入と教師の学び	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 現代教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 27-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 深谷圭助、吉川龍生、王林鋒、関山健治、Sian Cafferkey、Janet Adsett	4. 巻 17
2. 論文標題 複言語主義に基づく英国の小学校におけるフランス語辞書引き学習の実践	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 現代教育学研究紀要	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 深谷圭助、吉川龍生、王林鋒、関山健治、廣千香、水本良恵	4. 巻 15
2. 論文標題 中学校英語科における辞書引き学習実践に関する研究	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 現代教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 51-61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 荻野友範、吉川龍生、深谷圭助	4. 巻 18
2. 論文標題 高等学校の中国語授業における辞書引き学習導入実践：紙の辞書とオンラインツール活用の試み	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 慶應義塾外国語教育研究	6. 最初と最後の頁 44-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 深谷 圭助、吉川 龍生、王 林鋒、関山 健治	4. 巻 8
2. 論文標題 イギリスの小学校英語教育におけるJB（辞書引き学習）モデル導入事例に関する考察	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 複言語・多言語教育研究	6. 最初と最後の頁 151 - 160
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 Keisuke Fukaya, Tatsuo Yoshikawa, Linfeng Wang, Kenji Sekiyama & Edmund Lim
2. 発表標題 Japanese "Jishobiki" from British teacher's interpretation
3. 学会等名 The World Association of Lesson Studies (WALS) International Conference (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 深谷圭助
2. 発表標題 イギリスの公立小学校における辞書引き学習の導入と教師の学び
3. 学会等名 日本教育方法学会第57回大会（宮城教育大）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 深谷圭助
2. 発表標題 中学校英語科における辞書引き学習実践に関する研究 ヨーロッパ言語共通参照枠の理念に対応した汎用的な自己調整学習の実践・検証
3. 学会等名 日本教育方法学会第58回大会（山口大学）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 吉川龍生、荻野友範、深谷圭助
2. 発表標題 高等学校での実践データに基づく中国語「辞書引き学習」導入パッケージ
3. 学会等名 中国語教育学会第21回全国大会（東海大学）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Tatsuo Yoshikawa
2. 発表標題 A Supplemental package of vocabulary teaching tools for improving autonomous learning 一得s員Chinese Language education: Integrating paper dictionaries and digital technology
3. 学会等名 British Chinese Language Teaching Society (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 吉川龍生
2. 発表標題 中国語辞書引き学習の導入実践報告
3. 学会等名 第39回高等学校中国語教育研究会全国大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Linfeng Wang, Yuko Takeishi, Keisuke Fukaya, Tatsuo Yoshikawa, Kenji Sekiyama
2. 発表標題 A Collaborative Case Study of Effects of Common Language Learning Strategy Model in English Classes at a Junior High School in Japan
3. 学会等名 The World Association of Lesson Studies (WALS) International Conference (国際学会)
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 境 一三, 山下一夫, 吉川龍生, 縣由衣子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 三修社	5. 総ページ数 186
3. 書名 外国語教育を変えるために	

1. 著者名 深谷圭助, 吉川龍生, 関山健治, 王林鋒	4. 発行年 2024年
2. 出版社 三省堂	5. 総ページ数 383
3. 書名 世界に広がる辞書引き学習 汎用的語彙学習方略モデルの開発	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	吉川 龍生 (Yoshikawa Tatsuo) (30613369)	慶應義塾大学・経済学部(日吉)・教授 (32612)	
研究分担者	関山 健治 (Sekiyama Kenji) (40331186)	中部大学・人間力創成教育院・准教授 (33910)	
研究分担者	王 林鋒 (Linfeng Wang) (70806322)	大阪教育大学・連合教職実践研究科・准教授 (14403)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
英国	CastlemortonCE PrimarySchool	Altrincham Grammar School for Boys		
シンガポール	Madrasah Isyad Al-Islamiah			